

百周年を迎えるまでの3年間

高 橋 柏

私は1996年4月から99年3月まで3年間、附属図書館で仕事をした。3年で3人の館長に仕えた。館長は任期3年である。長尾館長は任期を1年残し97年4月工学研究科長になった。館長候補者は附属図書館商議会議委員の選挙で選ばれ、総長が評議会の了承を得て指名する。館長候補者選考には、細々とした手順があり、通常4ヶ月かけて行われるが、2月に正式に長尾館長の工学研究科長の就任が決まってから手続きに入ったので、1ヶ月足らずで館長候補を決める必要があり、商議会の日程調整に苦労した。後任は工学研究科の万波館長で、停年1年前だったが選ばれた。98年4月就任の菊池館長も3年の任期を待たず2000年3月停年となる。京大の選挙への考え方は、その時点での最適任者を選ぶことに徹しているなという感想を持った。

毎年新しい館長となっても、全く困らなかった。識見豊かな3先生に素晴らしいご指導をいただいた。長尾館長には日曜開館、附属図書館のリニューアル、電子図書館、百年史の編集、学生用図書費の増額、万波館長には国立大学図書館協議会総会の京都開催、京大創立百周年記念事業、電子図書館及び業務システムの稼働、百年史の編集、菊池館長には全学共通科目「情報探索入門」実施、部局図書室との連携強化、3階閲覧室の開設、A Vホールのマルチメディア化、百年史の編集と盛り沢山の仕事をやっていただいた。3先生とも大学とりわけ学生思いだった。特に学生の学習環境の充実には尽力いただいた。任期は別として、3館長とも任務は十二分に全うしていただいた。

このなかでも電子図書館システム導入は3年間で職員皆が最も力を傾けたものの一つである。電子図書館は長尾館長の研究テーマだった。長尾先生は90年頃から電子図書館研究会を主宰し、学内外の研究者、図書館員と研究し、パイロット電子図書館システム「アリアドネ」を制作、実験を重ねていた。図書館は長尾先生の好意でシステム一式を借り、コンテンツの制作等について実験していた。

96年4月赴任直後、電子図書館に関して学術審議会の建議が近々出されるので予算化される可能性があることを長尾館長に申し上げたところ、ぜひ概算

要求して欲しいとのことだったので、急ぎ若手職員が集まり情報発信型の京大電子図書館構想をつくった。時々、長尾館長にビールを無心し、館長を囲んで電子図書館についてアイデアを出すブレインストーミングを行った。京大電子図書館のキャッチコピー「京都大学エンサイクロペディア」机の上に京都大学を」はそんな中での若手職員の合作だった。5月の商議会で概算要求事項の変更について了承を得た後、文部省に概算要求書を提出した。幸い、長尾館長は、総合情報メディアセンター、情報学研究科の創設のこと等で頻りに文部省に行っていたので、ついでに、担当の学術情報課長にも何度かお話しいただいた。

電子図書館の予算でコンピュータの借料が従来の3倍になった。業務システムの更新とシステム導入が同時だったので、一挙に全学の図書館システムがオープンシステム化され、長尾館長が目標とした「全学図書館職員に1台のパソコン」が実現した。業務の標準化をめぐる理学部から教室自治を侵すものとの批判もあったが、90名を超える職員がワーキンググループに参加し、研修会も頻りにやることができた。附属図書館、部局図書室を問わず皆が熱心に取り組んでくれた。98年1月目録検索システム、貸出業務はじめ業務が順次動き出した。新しいシステムが軌道に乗るまで多少時間がかかるが、その間殺到する苦情の処理に追われた職員の方々には心からお礼を申し上げる。導入作業の真っ只中で「要」の水野受入掛長、長嶺経理掛長が急逝した。かえすがえすも残念なことである。

京都大学では、97年4月、総合情報メディアセンター、情報学研究科、電子図書館が発足した。従来からの大型計算機センターとあわせ、最先端の情報に関する教育、研究組織及び支援基盤ができた。大学創立百周年、21世紀の直前という時期の象徴的な出来事だったのではなかろうか。

これからも京大図書館が1日3千人、最大5千人の利用者の皆さんのみならず、茶目っ気たっぷりで悪さをする学生諸君からもこよなく愛される京大でもっとも快適な空間であって欲しいと願っている。

(たかはし かしわ：前附属図書館事務部長 現東京大学附属図書館事務部長)